2024年 1月31日付「茨城新聞」掲載

切れ目ない強力打線

常総学院 センバツに挑む 中

打撃

6試合連続2桁安打

関東大会準々決勝の花咲徳栄戦。同点で迎えた三回裏、９番池田の適時二塁打でこの回２点目のホームを踏む一走・鈴木（中央）＝2023年10月23日、栃木県総合運動公園野球場、高松美鈴撮影

持ち味の堅守に加え、昨秋大会で光ったのは「どこからでも得点が取れる」つながりのある強力打線だ。

地区大会から調子を上げた打線は、県大会5試合でチーム打率は3割6分9厘。合計55安打、47点を奪った。続く関東大会も、センバツ出場が有力となる4強を懸けた大事な一戦で機能した。

準々決勝の花咲徳栄戦（埼玉1位）。1点を先制した後の二回、エース小林芯汰（2年）が一挙に4点を失った。それでも「打って取り返せる自信があった」と選手たちは口をそろえた。二回裏、先頭の7番・鈴木駿希（同）が右前打で出塁し、送りバントと死球で1死一、二塁と好機を広げると、相手の意表を突くセーフティーバントを含め1～4番まで4連打。4点を奪い返し逆転した。さらに同点とされた三回には、下位打線が3安打を放って2点を勝ち越し、そのまま押し切った。

県大会から関東大会準々決勝まで6試合連続2桁安打を記録した。キーワードは「一発で仕留める」、「センター返し」。島田直也監督(53)が就任以来、言い続けてきたことでもある。練習では「初球を特に大事にする」と4番の武田勇哉（同）。追い込まれた後は、バットを短く持ち、球を見極める。一人一人が場面に応じた役割を果たす。島田監督は「自分を犠牲にしてでも『つなぐ』という野球ができていた」と振り返った。

今大会から低反発の新基準バットが導入される。チームは関東大会後すぐに低反発バットを使用した練習を積んできた。武田は「前にも後ろにも信頼できる打者がいる。甲子園でもつなぐ打撃を意識したい」と強調した。

打撃練習に取り組む常総学院の選手たち。中央は武田＝1月30日、土浦市中村西根の同校野球場